

まえがき——たくさん読んで、たくさん書く

日常生活のなかで文章を書く機会が多い。家族や友人に宛てた近況報告やお礼状。役所や会社に提出する書類や企画書。自分が属する組織や集団の会報やニュース。それはいずれも短い文章、すなわち短文である。一〇〇字くらいから、せいぜい原稿用紙五、六枚（二〇〇〇字から二四〇〇字）だろう。短文だから簡単に書けるかといえ、決してそんなことはない。むしろ短文こそ「書く力」が問われる。簡にして要を得た短文を「書く力」を身につけるには、先人たちが書いた名短文をたくさん読むことが最短の道であろう。

幸いなことに、日本語の表現には、和歌や俳句という字数の少ない表現形式があり、古今よく読まれる随筆もほとんどは短文である。清少納言の『枕草子』も兼好法師の『徒然草』も、江戸時代の数々の随筆集も、短文集である。短文による表現の伝統は今日まで受けつがれている。たとえば戦前から戦後にかけて活躍した作家・石川淳の書いた短文には目を見張るような名人芸が発揮される。加藤周一（一九一九—二〇〇八年）という作家・思想家も、日本の短文文

化の伝統に連なる名文家である。石川や加藤の水準まではいかなくとも、彼らの名文から学ぶことは多くある、と私は考える。

本書では加藤周一の書いた名短文を例に採りながら「書く力」を養うことを目指す。なぜ加藤周一なのか。加藤はアカデミーとジャーナリズムのはざままで仕事をした人だからである。生涯に書いた文章の総量は、四〇〇字詰め原稿用紙で数万枚に達する。その大半は原稿用紙一枚以下の短文である。主としてジャーナリズムで執筆活動を繰りひろげたことによる。加藤の文章は、中学校や高等学校の教科書に採りあげられ、高等学校や大学の入学試験問題にしばしば用いられてきた。われわれが遣っている現代日本語は、和文体と漢文体、そして西洋語の文体、この三つを混淆こんごうさせている。いわば「和漢洋混淆体」というべき文章である。加藤の書く文章は、この和漢洋混淆体で書かれている。しかも二〇世紀を生きた人であり、遠い過去の人ではなく、馴染なじみやすい。加藤は現代日本語の名文家なのであり、大いに学ぶことができる先人のひとりである。

本書では、まだ文章を書きなれていない人が「書く力」をつけるうえで、文章の基本を述べる。第Ⅰ部に基礎編、第Ⅱ部に実践編、第Ⅲ部に応用編を設けて三部構成とした。

第Ⅰ部基礎編には文章を書くときのもっとも基本的なことを採りあげた。その「基本の基」

は、一文を短くし、読点などの記号に注意を払うことである。このふたつだけでも実行できれば、少なくとも分かりやすい文章に近づく。しかし、「書く力」とは、文章作成技術のことだけでは足りない。知識を増やし、経験を積み、観察を重ね、感性を磨くことも「書く力」を養う。それらの力を活かしながら、主題を設定し、文章の構造をつくっていく方法を考える。

第Ⅱ部実践編では、文章表現の実際を検討する。論点の絞り方、強調の仕方、比較対照の方法、例示の方法、具体と抽象の往復、現在と歴史の往還、比喩表現、諷刺表現、確率表現など一二の問題を採りあげた。最初からこれらのすべてに留意するのではなく、自分もつとも取り組みやすい主題から始め、それができれば次に進んでいけばよい。

第Ⅲ部応用編に、紹介文、追悼文、書評文、鑑賞文という章を設けた。われわれが書く機会が比較的が多い文章だと考えられるからである。

川端康成は『新文章読本』（新潮文庫、一九五四年）で「書きに書く」ことを勧め、丸谷才一は『文章読本』（中公文庫、一九八〇年）で「名文を読め」と薦めた。文章修業でもっとも大事なことは「たくさん読んで、たくさん書く」ことである。いや、これしかないといってもよい。先人たちも時間をかけ「たくさん読んで、たくさん書く」ことによって「書く力」を鍛えたのである。

目次

まえがき——たくさん読んで、たくさん書く

3

第Ⅰ部 基礎編

11

第1章 文は短く——〔通い慣れたところ〕

12

第2章 読点は雄弁だ——〔「美」について〕

23

第3章 見ることが基本——〔『上野毛雑文』あとがき〕

42

第4章 五感でつかむ——〔美しい顔〕

54

第5章 経験を通して考える——〔ある少女の眼〕

64

第6章 主題を設定する——〔再見『リア王』〕

78

第7章 起承転結をつくる——「小さな花」

89

第8章 文章に構造を与える——「鷗外全集に寄す」

100

第Ⅱ部 実践編

115

第9章 むつかしいことをやさしく——「嘘について」

116

第10章 論点は三点に絞る——「土着文化または『萬葉集』の事」

129

第11章 強調で論点は明確に——「堀辰雄愛読の弁」

144

第12章 鮮やかな比較対照——「近うて遠きもの・遠くて近きもの」

153

第13章 大局観と細部への眼——「人と方法」

167

第14章 例示は秩序立てて——「中村真一郎・その三悪と三善」

179

第15章 具体と抽象の往復——「美しい時間」

192

第16章 現在と歴史の往還——「帝国主義または杜詩の事」

201

第17章 比喩がもつ説得力——「三匹の蛙の話」

214

第18章 諷刺諧謔で真実を——「オリンピック万歳」

230

第19章 否定による肯定——「『荷風全集』推薦文」

246

第20章 確率表現を的確に——「誄〔遠藤麟一郎〕」

258

第Ⅲ部 応用編

269

第21章 紹介文——「丸山眞男」

270

第22章 追悼文——「福永武彦の死」

281

第23章 書評文——「文は人なりまたは『ラッセル自伝』の事」

292

第24章 鑑賞文——「肉体は悲し」

302

あとがき

314

加藤周一略年譜

318

底本一覧

322